



## ■きのこって何？

ナツメ社「きのこ図鑑」より

きのこは、菌類が胞子をつくり散布する器官で、専門用語で「**子実体**（しじつたい）」とよびます。菌類はふだんは菌糸の状態で地中や材、落ち葉などの中でくらしていますが、発生時期になるときのこが地上に現れます。傘の下面は、ひだ、管孔(かんこう)、しわひだ、針(はり)などですが、どれもその表面に、胞子をつくる「**子実層**（しじつそう）」という細胞の層があります。子実層ができる、ひだや管孔などは「**子実層托**（しじつそうたく）」とよびます。子実層には胞子をつくる器官があり、「**担子器**（たんしき）」で胞子をつくるグループを**担子菌類**（たんしきんるい）、「**子嚢**（しのう）」という袋の中につくるグループを**子嚢菌類**（しのうきんるい）とよびます。

### ■部位の名称と解説

#### ●担子菌類

ひだや管孔にある担子器の先に胞子ができるグループ。子実体の形が棍棒状や球状でも、必ず担子器をもつ。

#### ●子嚢菌類

頭部の表面や茶碗の内側の表面にある子嚢という袋の中に胞子ができるグループ。



キノコを同定する上で大切なこと

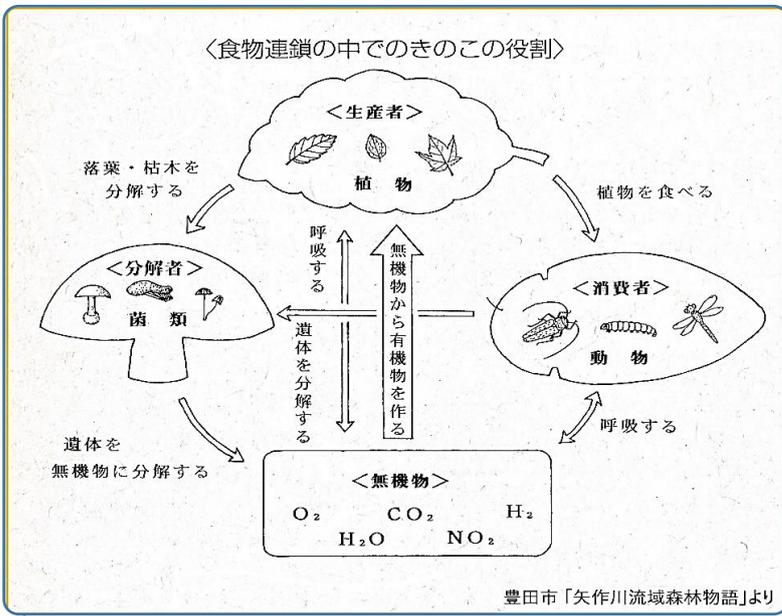
- どこに生えていたか：何から生えていたか、周りの植生は何か記録しておくと同定がしやすいキノコにとって生育場所は食事（分解）とも関係していて重要である。
- どんな生え方か：束になっていたり、輪のように広がっていたり種によって生え方が様々。
- どんな見た目か：傘だけでなくひだや柄、つば、石突、肉質など確認すべきポイントが多い。  
特にひだは同定する上でとても重要なので必ず確認すること。また顕微鏡で胞子を観察することでよりキノコの特徴をつかむこともできる。
- その他：特徴的なにおいを持つ種もあるので記憶しておくと同定や同種の発見に役立つこともある。  
まれに、味によって種を判別できることもあるが中毒などもあるため行わないこと。



**memo 樹木・野鳥・昆虫も忘れずに**  
 ・サカキ(榊)・アカメガシワ(赤芽柏)  
 ・ヤマハギ(山萩)・イソノキ(磯の木)  
 ・クチナシ(山梔子)・ヒイラギ(柊)  
 ・ウルシの仲間・ツツジの仲間  
 ・キビタキ(黄鶺鴒)・コゲラ(小啄木鳥)

今回は 盛夏 7月11日(日)  
 ～ 森からあふれるいのちの伝言～  
 午後からは 名古屋市の  
 「相生山緑地計画検討会」  
 代表2名が参加します

**連絡先(古川)**  
 tell/fax: 052-821-6463  
 ケイタイ: 080-5124-6463  
 e-mail: viva\_forest@yahoo.co.jp  
 ホームページ: ラブリーアース → 検索  
 ブログ: 相生山からのメッセージ



キノコの食毒

毒キノコと食用キノコを簡単に見分ける方法はありません。よく聞く「茄子と一緒に食べれば大丈夫」「ナメクジが食べていたら大丈夫」「縦に割けたら大丈夫」などは迷信です。

野生のものは基本的に食べないようにしましょう。どうしても食べたい場合は自己責任でよく調べ、一度毒見を挟んでから食べるようにしましょう。

ラブリーアース ホームページ「森のひとり言」北岡明彦  
その壱百拾参：自然のしくみを楽しもう(5)より

食物連鎖と菌類

自然のしくみを理解していると、山歩きやウオーキングが本当に楽しくなります。「植生遷移」「植物の垂直分布と水平分布」に続き、今回は植物と動物の関係である「食物連鎖(しょくもつれんさ)」を紹介しましょう。

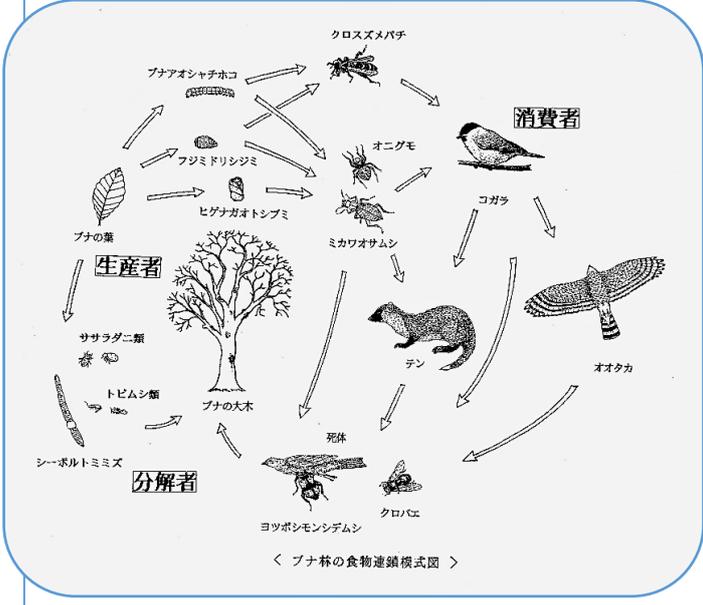
近年いろいろな新しい呼び名はありますが、ひとつの生体系の中で多くの動植物が関係して、それらが「食う—食われるの関係」で鎖のように、次々とつながっていることを「食物連鎖」と呼びます。

もちろん、出発点は、無機質である二酸化炭素CO<sub>2</sub>と水H<sub>2</sub>Oから太陽光エネルギーを使って有機物である デンプン C<sub>6</sub>H<sub>12</sub>O<sub>6</sub> を作る葉緑素(クロロフィル)を持った植物です。これを生産者と呼びます。

光合成能力を持たない動物の多くは、葉・幹・実などを直接食べる(植食性動物と呼ぶ)か、その植食性動物を食べ(肉食性動物と呼ぶ)、消費者と呼ばれます。

さらに、生産者や消費者の遺体を分解して、植物が根から吸収しやすくする役割を担う昆虫・土壌動物・菌類などを、分解者(還元者)と呼びます。

これらすべての動植物が互いに複雑に絡み合って、食物連鎖が成立します。例えば、豊田市稲武町にある、面の木峠ブナ原生林における食物連鎖をごく簡略化すると、次の図のようになります。



生産者であるブナの葉をブナアオシヤチホコやフジミドリシジミなど、いろいろな昆虫(主に幼虫)が食べ、これらを「第一次消費者」と呼びます。

それらの幼虫や成虫をクモ類やハチ類といった動物たちが食べ、これらを「第二次消費者」と呼びます。

さらに、それらを「第三次消費者」であるコガラなどが餌として食べ、コガラを「第四次消費者」であるオオタカやテンが食べます。

そして、分解者であるシハラダニやハエが動物の遺体や糞を サハラダニ・トビムシ・ミズなどが落ち葉を分解し、最終的には細菌や菌類の働きにより、植物が吸収できるような状態まで分解されます。

超模式的に図化すればこうなりますが、実際には、そこに住むすべての生物が複雑に関わって食物連鎖が成り立ちます。一度、じっくり考えてみてください。